

研究ノート

看護学生の実習適応感に関する研究（第1報）

—— 尺度作成の試みと信頼性・妥当性の検討 ——

高橋ゆかり¹⁾・柴田和恵¹⁾・鹿村真理子¹⁾

Study of practice adjustment of nursing students (Part 1)

—— Trial of scale creation and examination of reliability/validity ——

Yukari TAKAHASHI¹⁾, Kazue SHIBATA¹⁾, Mariko SHIKAMURA¹⁾

I. はじめに

看護の役割は、人間である対象に対して健康的な日常生活ができるように援助することである。金子¹⁾が、「看護とは、理論的根拠や知識に基づいた実践の科学の1つであり、実践していくために、科学的裏づけを持って技術を安全に合理的に適応させていくという行動を伴った科学である。」と述べているように、看護においては、知識とともに実践力が求められている。そのため、看護学の基礎教育において臨地実習(以下「実習」という)は重要であり、本学においてもカリキュラムに占める実習の割合は大きい。江口²⁾が「実習の成否が学生の看護職への成長に大きな意味を持つ。」と述べているように、実習の成否がその後の学生の学習への意欲や継続に影響を及ぼすものとする。さらに江口²⁾は基礎看護学実習において、「生老病死に関わる緊張の場面で学習する学生は、それまでの生育歴により、ものの感じ方、表現の仕方にとまどいを感じ、極端には自信喪失に落ち込む学生がいる。」ことを指摘している。また、田村ら³⁾の調査によれば、学生が学生生活の中でストレスと感じていたものは、看護研究と実習であった。これらの先行研究が示しているように、学生が困難さを感じている実習であるが、我々は、実習の成否の鍵を握るものの一つに、学生自らが積極的かつ主体的に目標を達成しようとする実習への「適応感」があると考えた。看護学生の実習適応に関する研究はいくつかみられる^{4)~7)}が、実習適応感を測定する尺度に関する研究は少ない。吉永ら⁴⁾は、学生の主観的な実

習適応感を知るために、概念枠組みにマーシャ (Marcia, J.E.) による4つの自我同一性地位に基づいた尺度を作成していた。これは、看護学生が実習を体験する中での主観的な自我同一性確立の程度(地位)を測定するための尺度であり、どのような場面で実習に適応していると感じているかを測定することはできない。我々は、適応とは「人と環境との良い調和・平衡状態における人格の状態である。」⁸⁾ことから、適応感を「人と環境に適応し、目標を達成しようとする行動や意識」と定義して学生の主観的な評価を用いた尺度を作成することを試みた。

そこで本研究では、看護学生における実習適応に関する状態を測定する評価尺度を作成し、実習適応感の構造を明らかにすると共に、作成した実習適応感尺度の信頼性・妥当性を検証することを目的とする。

II. 研究方法

1. 用語の操作的定義

適応感：適応とは「人と環境との良い調和・平衡状態における人格の状態」であり、人と環境に適応し、目標を達成しようとする行動や意識

実習適応感：実習への積極的かつ主体的な目標達成行動や意識

2. 実習適応感の概念枠組み

先行研究より看護学生の実習における実習適応感はどういう要素で構成されているかを検討した。

1) 群馬パース大学保健科学部看護学科

看護学生の実習は、学生が患者との人間関係を維持しながら、看護師としての社会的役割を果たし社会性を獲得すると同時に、看護者としての自分自身をありのまま認め、自我を確立するという2つの側面が課題とされる。また、この自我確立と社会性確立の2側面は、看護学生の多くがおかれている、青年期の発達課題の自我同一性の確立を、促進させる要因であるとされている⁹⁾。このことから、青年期の発達課題である自我同一性の確立を促すには、実習に積極的かつ主体的に取り組み、実習に適応していくことが必要であると考へた。

元来、適応とは「進化論の影響下で生体の生存に有益な、構造ないし行動の要請に応じて不要な行動成分を除去する過程を指し、学習・動機付けと密接な関連をもつ。」¹⁰⁾とされていた。adaptationやadjustmentが同義で使われるが、前者は適合性を求める柔軟性、後者はより積極的な努力を媒介とするようなニュアンスの差があるため、後者の意味で使われる傾向である¹⁰⁾。また、より積極的な努力を媒介とした適応(adjustment)にも、自分を現在の環境に対してできるだけ合わせていくとする受動的適応と、自分の適性や自分の理想を実現するために環境そのものを変える努力をする能動的適応がある¹⁰⁾。

南口ら¹¹⁾は看護学生の短大生活への適応を調査するにあたり、適応を「自分の能力や適性を十分に発揮して、その結果本人が満足している状態であり、いわゆる自己実現している状態」と定義していた。そして、「満足度」「入学の志望度」「対人関係」「学習状況」「学生生活」「入学前および入学後6ヶ月の短大生活に対するイメージの変化」の6側面から適応状況を分析していた。これは適応を、自分の理想を実現するための能動的適応と捉えていると考えられる。

また、落合ら¹²⁾は入院患者の適応の概念枠組みを検討するにあたり、適応を「個人が、周囲の人間・環境との相互作用の中で、自分の置かれている状況に慣れ、肯定的な反応を示すこと」と定義していた。そして、その構成概念に、「患者役割因子」「治療・検査・看護的援助因子」「物理的環境因子」「日課因子」「ルール・規則因子」「医師との関係因子」の6因子をあげていた。これは適応を、現在の環境に合わせていく受動的適応と捉えていると考えられる。

これらのことから看護学生の実習を、学校とは異なる病院環境の中で自分の能力や適性を十分に発揮して、学生自身が望む看護師資格取得のプロセスと位置

づけるならば、受動的適応と能動的適応の両面から捉えることが必要と考えられる。

看護学生の実習における実習適応について検討した研究は幾つか見られる。

吉永ら⁴⁾は自我同一性確立の視点から、学生の主観的な実習適応感を知るために、マーシャ(Marcia, J, E.)の自我同一性地位に基づいた構成概念の尺度を作成した。その中で吉永ら⁴⁾は実習への適応感を、実習で危機を乗り越え自主的積極的に実習に取り組んでいる「実習適応感」、実習に対する迷いの状態にあり一応は努力するが受身的で不全感の強い「実習モラトリアム」、実習に対して自発的な学習意欲が起こらず不安が強い「実習拡散感」の3因子に分類していた。吉永ら⁴⁾の調査では、看護学生は「実習適応感」因子が最も高く、学生の約50%が主観的には実習に適応していると報告していた。しかしマーシャの自我同一性地位理論は、自我確立と社会性確立の2側面をもつとするエリクソンの発達理論の考え方とは異なり、我々の考える実習適応感を構成する概念とは成りにくいと考えた。

一方、細見ら⁷⁾は看護師としての自己イメージに着目した適応感尺度を作成するにあたり、「現在の学習はおもしろいですか」「現在の生活に満足していますか」「看護師をめざして良かったとおもいますか」「事情が許せば看護師をずっと続けたいと思いますか」の4項目をあげ、合計得点を適応感得点として調査していた。その結果、肯定的な現実自己像を保てるかどうか、適応感と強く関係していた。また、看護師としての自分自身に好ましいイメージを保つことが重要であり、専門職としての前向きな姿勢を失わない事が適応感に強く影響していたことを報告していた⁷⁾。このことから、「看護職に対する満足感」が実習適応感を構成する概念として含まれると考えた。

また、中平⁶⁾は看護学生のストレスと実習適応に関連する生活環境について調査していた。看護学生の多くがおかれている、青年期の自我同一性確立には、ストレス対処能力が強く関連しており、自我同一性が確立し自己が安定するほどストレス対処しやすいことは既に報告されている³⁾。中平⁶⁾は、実習中のストレス構造は、「看護職に対する満足感」「教員・グループメンバーのサポート」「実習適応」「自己能力評価」「看護師のサポート」「実習での困惑体験」「看護関係の不成立」の7因子から成ると報告していた。使用した質問項目は久保・田尾の「バーンアウト尺度」¹³⁾と堤の「臨

床実習用ストレス質問紙の日本語版¹⁴⁾を参考に独自に作成したものであった。中平⁹⁾はこの中で、「実習適応に一番影響を与えていたのは教員・グループメンバーのサポートであり、看護学生は教員・クラスメートのサポートがあるほど実習に適応でき、看護職に対する満足感も高まる。」と指摘していた。更に「次に影響を与えているのが、実習での困惑体験であった。」と報告していることから、「周囲のサポート体制」と「実習での困惑体験」も実習適応感を構成する概念として含まれると考えられた。

また、辺士名ら¹⁵⁾は学校生活に不適應感を抱く理由をもとに「友人との関係」「先生との関係」「価値・規範意識」「自己充実感」「肯定的自己」の意識を調査していた。この中で、肯定的自己概念は適應群で有意に高く、達成感や満足感が自己肯定意識を高め、適應に強く関与していることを報告していた。このことから、「肯定的自己評価」は実習適応感を構成する概念として含まれると考えられた。

これらの結果を参考に、看護学生が実習に適応していくために必要と考えられる「ルール・規則」「看護職に対する満足感」「周囲のサポート」「実習での困惑体験」「肯定的自己評価」の5領域を、実習適応感の構成概念として抽出した。

次に5つの下位概念について、これら先行研究を参考に独自に項目を収集し、各項目のバランスを考慮した上で、35項目を調査項目として選択した。評定は「非常によくあてはまる」「少しあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法で、各5～1点を配置した(資料1)。

3. 調査対象

基礎看護学Ⅱ実習を修了した看護系短期大学2年生の82名を対象に実施した。回答者79名のうち、全ての項目に欠損値のない75名の調査用紙を分析の対象とした。

4. 調査時期・方法

調査は基礎看護学Ⅱ実習終了後の2005年9月に集団調査法で実施した。

5. 内容妥当性の検討

作成された質問項目が、看護学生の実習適応感を測定する項目の内容になっているか、質問が適切であるか、表現の不明瞭な項目などがいないか、実習適応感と

して適切な質問項目であるかを検討した。

6. 表面妥当性の検討

各質問項目について、対象者が回答する上で理解困難な箇所、分かりづらい表現、類似質問等がないかを確認した。

7. 回答分布の偏り

回答分布の偏りのフロア効果と天井効果を検討した。

8. 構成概念妥当性の検討

因子分析には主成分分析を選び、バリマックス回転を行い、因子構造を明らかにした。

9. 信頼性の検討

実習適応感尺度の内的整合性を示すクロンバックの α 係数を用いて検討した。

10. 基準関連妥当性の検討

実習適応感尺度の概念枠組みと深い関連が指摘されている¹⁶⁾菊地の社会的スキル尺度「Kiss-18(Kikuchi's Social Skill Scale. 18項目版)」¹⁷⁾とのPearsonの積率相関係数を算出し、基準関連妥当性の検証をした。

Kiss-18は若者にとって必要な社会的スキルを①「初歩的スキル」(発話、会話の継続や自己紹介)、②「高度のスキル」(依頼、支持、謝罪)、③「感情処理のスキル」(感情表現、他者の怒りの処理、自制心)、④「攻撃に代わるスキル」(他者の援助、和解、他者とのトラブルの処理)、⑤「ストレスを処理するスキル」(矛盾した情報の処理、非難の処理、集団圧力への対応)、⑥「計画のスキル」(行動決定、問題の発見、目標設定)の6因子から構成した尺度であり、各3項目合計18項目からなる(資料2)。評定は「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうでない」「いつもそうでない」の5件法で、各5～1点が配置されている。得点が高いほど社会的スキル能力の認知が高いことを示し、尺度の信頼性は α 係数が0.83であり、再テスト法では4ヶ月の間隔で0.83という高い信頼性を示し、妥当性についても検証され高い妥当性が確保されている¹⁸⁾。

11. データ解析

全てのデータ解析には、SPSS11.5J for Windows

資料1 実習適応感尺度

	非常によくあてはまる	少しあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
実習についてお伺いします。 最もあてはまる番号に○をつけて下さい。					
1 時間厳守に努めている	5	4	3	2	1
2 これから看護を行っていく上で自信がついてきている	5	4	3	2	1
3 実習に積極的に取り組んでいる	5	4	3	2	1
4 看護技術は自信を持って実施している	5	4	3	2	1
5 明確な目的がないと患者を訪室しにくい方だ	5	4	3	2	1
6 グループメンバー以外に何でも相談できる友人がいる	5	4	3	2	1
7 わからないことは指導教員によく聞いている	5	4	3	2	1
8 わからないことは病棟看護師によく聞いている	5	4	3	2	1
9 実習をすることによって成長していると思う	5	4	3	2	1
10 実習では、何からしていいのか見えなくて焦ってしまう方である	5	4	3	2	1
11 実習記録の内容が充実するよう努めている	5	4	3	2	1
12 受け持ち患者からケアを拒否されるのではないかと不安である	5	4	3	2	1
13 何でも相談できるグループメンバーがいる	5	4	3	2	1
14 病棟看護師から話しかけられると緊張して困惑してしまう方である	5	4	3	2	1
15 病棟の日課に合わせて計画をたて、行動ができるように努めている	5	4	3	2	1
16 看護師は私の性分にあっていると思う	5	4	3	2	1
17 実習中の些細な失敗でも落ち込んでしまう方である	5	4	3	2	1
18 事前学習や自己学習を十分行い実習している	5	4	3	2	1
19 患者の気持ちが理解できるように努めている	5	4	3	2	1
20 他の実習グループがうらやましいと思う	5	4	3	2	1
21 指導教員とよい人間関係がとれるように努めている	5	4	3	2	1
22 実習場所を離れる時は、所在を明らかにするように努めている	5	4	3	2	1
23 看護は有意義な仕事であると実感している	5	4	3	2	1
24 実習到達目標に向けて努力している	5	4	3	2	1
25 実習に必要な知識を十分に持っている	5	4	3	2	1
26 対象に応じたコミュニケーションができるように努めている	5	4	3	2	1
27 カンファレンスで安心して自由に発言している	5	4	3	2	1
28 学内に何でも相談できる教員がいる	5	4	3	2	1
29 指導者および学生同士、適切な言葉遣いができるように努めている	5	4	3	2	1
30 勉強不足のまま実習を行っている	5	4	3	2	1
31 受け持ち患者とよい人間関係がとれるように努めている	5	4	3	2	1
32 カンファレンスでメンバーから助言や質問されると嫌だと感じる	5	4	3	2	1
33 記録物の提出期限を守っている	5	4	3	2	1
34 病棟看護師とよい人間関係がとれるように努めている	5	4	3	2	1
35 指導教員に何でも相談している	5	4	3	2	1

資料2 社会的スキル尺度

	い つ も そ う だ	た い て い そ う だ	ど ち ら と も い え な い	た い て い そ う で な い	い つ も そ う で な い
1 他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか	5	4	3	2	1
2 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	5	4	3	2	1
3 他人を助けることを上手にやれますか	5	4	3	2	1
4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	5	4	3	2	1
5 知らない人とでも、すぐに会話がはじめられますか	5	4	3	2	1
6 まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	5	4	3	2	1
7 こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか	5	4	3	2	1
8 気まずいことがあった相手と上手に和解できますか	5	4	3	2	1
9 仕事をする時に何をどうやったらよいか決められますか	5	4	3	2	1
10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか	5	4	3	2	1
11 相手から非難された時にも、それをうまく片付けることができますか	5	4	3	2	1
12 仕事の上でどこに問題があるかすぐに見つけることができますか	5	4	3	2	1
13 自分の感情や気持ちを素直に表現できますか	5	4	3	2	1
14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	5	4	3	2	1
15 初対面の人に自己紹介が上手にできますか	5	4	3	2	1
16 何か失敗した時に、すぐに謝ることができますか	5	4	3	2	1
17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか	5	4	3	2	1
18 仕事の目標をたてるのに、あまり困難を感じないほうですか	5	4	3	2	1

人との関わりについてお伺いします。
最もあてはまる番号に○をして下さい。

を使用した。

合性があるかどうかについて、検討した結果、問題は認められなかった。

12. 倫理的配慮

学生には文書で研究の趣旨と倫理的配慮の内容を説明し同意を得た。また、研究以外の目的で使用しないことやプライバシーへの配慮を十分に明記した。尚本研究は、本学研究倫理委員会の審査を経て行ったものである。

III. 結 果

1. 回収率と有効回答数

回収率は96.3% (79名) であり、分析は全ての項目に欠損値のない75名の調査用紙を対象とした。有効回答率は90.2%であった。

2. 質問項目の内容妥当性の検討

内容妥当性について、概念枠組みと質問項目との整

3. 質問項目の表面妥当性の検討

表面妥当性の検討をした結果、回答の困難な項目は無かったが、語尾表現が不明瞭な項目を修正した。

4. 回答分布の偏り

より弁別力のある項目を選択するため、5件法で調査した35項目の度数分布から平均値と標準偏差による天井効果を分析し、分布の偏りの著しい9項目を削除し、26項目を採用した(表1)。

5. 構成概念妥当性の検討

26項目について因子分析し、因子抽出法は主成分分析、回転はバリマックス回転を採用した。因子の決定については、固有値1以上、因子負荷量0.40以上の項目を決定基準とした。さらにその結果から因子負荷量が

表1 実習適応感尺度の設問得点分布

	平均値	標準偏差	
1 時間厳守に努めている	4.62	0.57	*
2 これから看護を行っていく上で自信がついてきている	2.78	1.06	
3 実習に積極的に取り組んでいる	4.19	0.82	*
4 看護技術は自信を持って実施している	2.92	0.90	
5 明確な目的がないと患者を訪室しにくい方だ	2.92	1.28	
6 グループメンバー以外に何でも相談できる友人がいる	4.28	0.84	*
7 わからないことは指導教員によく聞いている	4.09	1.01	*
8 わからないことは病棟看護師によく聞いている	3.15	1.02	
9 実習をすることによって成長していると思う	4.22	0.80	*
10 実習では、何からしていいのか見えなくて焦ってしまう方である	3.88	0.91	
11 実習記録の内容が充実するよう努めている	4.04	0.75	
12 受け持ち患者からケアを拒否されるのではないかと不安である	3.38	1.04	
13 何でも相談できるグループメンバーがいる	3.86	1.05	
14 病棟看護師から話しかけられると緊張して困惑してしまう方である	3.69	1.05	
15 病棟の日課に合わせて計画をたて、行動ができるように努めている	3.95	0.77	
16 看護師は私の性分にあっていると思う	3.24	1.06	
17 実習中の些細な失敗でも落ち込んでしまう方である	3.68	1.17	
18 事前学習や自己学習を十分行い実習している	3.34	0.95	
19 患者の気持ちが理解できるように努めている	4.41	0.66	*
20 他の実習グループがうらやましいと思う	2.78	1.22	
21 指導教員とよい人間関係がとれるように努めている	4.19	0.85	*
22 実習場所を離れる時は、所在を明らかにするように努めている	4.09	0.86	
23 看護は有意義な仕事であると実感している	4.11	0.87	
24 実習到達目標に向けて努力している	4.00	0.79	
25 実習に必要な知識を十分に持っている	2.62	1.04	
26 対象に応じたコミュニケーションができるように努めている	4.00	0.79	
27 カンファレンスで安心して自由に発言している	3.36	1.20	
28 学内に何でも相談できる教員がいる	2.73	1.16	
29 指導者および学生同士、適切な言葉遣いができるように努めている	3.86	1.05	
30 勉強不足のまま実習を行っている	3.58	0.95	
31 受け持ち患者とよい人間関係がとれるように努めている	4.64	0.59	*
32 カンファレンスでメンバーから助言や質問されると嫌だと感じる	2.24	1.14	
33 記録物の提出期限を守っている	4.61	0.90	*
34 病棟看護師とよい人間関係がとれるように努めている	4.08	0.84	
35 指導教員に何でも相談している	3.69	1.15	
全体	3.69	0.95	

*：天井効果で削除した項目

0.40未満の1項目と、他因子にも0.40以上の負荷量を示している4項目、合計5項目を削除し、最終的には21項目を選定した。以上の結果から、意味のまとまりの良い4因子を採用した。因子分析の結果は、表2の通りであった。

第1因子では、「病棟の日課に合わせて計画をたて、行動ができるように努めている」(0.77)、「実習記録の内容が充実するよう努めている」(0.60)、「指導者および学生同士、適切な言葉遣いができるように努めている」(0.58)、「実習到達目標に向けて努力している」

(0.58)などに高い負荷が見られ、看護学生として実習を意欲的に行うために必要な姿勢を表す内容の6項目であり、『取り組み姿勢』と命名した。

第2因子では、「実習では、何からしていいのか見えなくて焦ってしまう方である」(0.76)、「明確な目的がないと患者を訪室しにくい方だ」(0.71)、「カンファレンスで安心して自由に発言している」(0.65)、「実習中の些細な失敗でも落ち込んでしまう方である」(0.63)などに高い負荷が見られ、実習を行う上での自信のなさや不安など自己に対する否定的評価を伴う内容の6

表2 因子分析

主成分分析		バリマックス回転	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子	取り組み姿勢	$\alpha=0.75$					
15	病棟の日課に合わせて計画をたて、行動ができるように努めている		0.767	-0.040	-0.034	0.044	0.593
4	看護技術は自信を持って実施している		0.658	0.079	0.432	0.160	0.651
26	対象に応じたコミュニケーションができるように努めている		0.657	-0.205	0.488	0.022	0.713
11	実習記録の内容が充実するよう努めている		0.600	-0.162	0.193	0.300	0.513
29	指導者および学生同士、適切な言葉遣いができるように努めている		0.581	-0.011	0.072	0.004	0.343
24	実習到達目標に向けて努力している		0.577	-0.060	0.375	0.167	0.505
16	看護師は私の性分にあっていると思う		0.560	-0.234	0.293	0.384	0.602
34	病棟看護師とよい人間関係がとれるように努めている		0.407	-0.396	0.078	0.151	0.351
第2因子	自己評価	$\alpha=0.77$					
10	実習では、何からしていいのか見えなくて焦ってしまう方である		0.103	0.764	-0.135	-0.094	0.621
5	明確な目的がないと患者を訪室しにくい方だ		-0.001	0.713	-0.251	-0.124	0.586
27	カンファレンスで安心して自由に発言している (逆転項目)		-0.278	0.647	-0.272	-0.137	0.589
17	実習中の些細な失敗でも落ち込んでしまう方である		0.046	0.628	-0.103	-0.177	0.438
32	カンファレンスでメンバーから助言や質問されると嫌だと感じる		-0.343	0.570	0.121	0.064	0.462
20	他の実習グループがうらやましいと思う		-0.223	0.518	0.023	0.013	0.319
12	受け持ち患者からケアを拒否されるのではないかと不安である		0.322	0.462	0.121	-0.417	0.506
第3因子	学習準備状況	$\alpha=0.76$					
25	実習に必要な知識を十分に持っている		0.126	-0.208	0.726	0.210	0.631
30	勉強不足のまま実習を行っている (逆転項目)		0.062	-0.116	0.721	-0.090	0.545
18	事前学習や自己学習を十分行い実習している		0.156	0.098	0.687	-0.053	0.509
2	これから看護を行っていく上で自信がついてきている		0.289	-0.267	0.533	0.285	0.520
22	実習場所を離れる時は、所在を明らかにするように努めている		0.324	-0.290	0.428	0.142	0.393
第4因子	基本的信頼感	$\alpha=0.62$					
23	看護は有意義な仕事であると実感している		0.208	-0.118	0.154	0.666	0.525
8	わからないことは病棟看護師によく聞いている		0.050	-0.209	0.154	0.648	0.489
13	何でも相談できるグループメンバーがいる		0.281	-0.141	-0.237	0.597	0.512
14	病棟看護師から話しかけられると緊張して困惑してしまう方である		-0.070	0.437	-0.068	0.595	0.554
28	学内に何でも相談できる教員がいる		0.267	-0.116	0.379	0.462	0.442
35	指導教員に何でも相談している		0.108	-0.307	0.279	0.308	0.278
因子負荷量の平方和			3.658	3.557	3.401	2.571	
因子の寄与率 (%)			14.069	13.679	13.080	9.889	
累積寄与率 (%)			14.069	27.748	40.828	50.717	

は削除項目

項目であり、『自己評価』と命名した。

第3因子では、「実習に必要な知識を十分に持っている」(0.73)、「勉強不足のまま実習を行っている」(0.72)、「事前学習や自己学習を十分行い実習している」(0.69)などに高い負荷が見られ、実習前の学習状況を表す内容の5項目であり、『学習準備状況』と命名した。

第4因子では、「わからないことは病棟看護師によく聞いている」(0.65)、「何でも相談できるグループメンバーがいる」(0.60)などに高い負荷が見られ、学生の精神的サポートへの基盤となる信頼感を表す内容の4項目であり、『基本的信頼感』と命名した。

また、全項目の累積寄与率は50.7%であった。

6. 相関係数の検討

実習適応感尺度全体の得点と下位尺度得点の相関関係を見ると、「取り組み姿勢」($r=0.79$, $p<0.001$)、「自己評価」($r=0.77$, $p<0.001$)、「学習準備状況」($r=0.75$, $p<0.001$)、「基本的信頼感」($r=0.71$, $p<0.001$)と高い正の相関を示していた。

7. 信頼性の確認

尺度の内的整合性を示すクロンバックの α 係数は、第1因子0.75、第2因子0.77、第3因子0.76、第4因子0.62であり、ある程度の信頼性が確認された。

8. 基準関連妥当性の検討

看護学生の実習適応感尺度の概念と関連の深いこと

表3 実習適応感尺度と社会的スキル尺度の相関関係

N=75	実習適応感尺度	実習適応感尺度			
		取り組み姿勢	自己評価	学習準備状況	基本的信頼感
社会的スキル尺度	0.66 ***	0.58 ***	0.43 ***	0.44 ***	0.61 ***
初歩的スキル	0.45 ***	0.33 **	0.31 **	0.34 **	0.43 ***
高度のスキル	0.55 ***	0.54 ***	0.33 **	0.34 **	0.49 ***
感情処理のスキル	0.45 ***	0.40 ***	0.24 *	0.36 **	0.44 ***
攻撃に代わるスキル	0.57 ***	0.50 ***	0.33 **	0.40 ***	0.57 ***
ストレスを処理するスキル	0.40 ***	0.34 **	0.38 **	0.10	0.39 **
計画のスキル	0.60 ***	0.56 ***	0.40 ***	0.44 ***	0.46 ***

*** : p<0.001 ** : p<0.01 * : p<0.05

が報告されている¹⁶⁾ KiSS-18との相関係数を算出し検討した。併存妥当性を検討した結果は表3の通りであった。

実習適応感尺度全体と社会的スキル尺度全体では有意な高い正の相関($r=0.66$, $p<0.001$)が認められた。また、実習適応感尺度全体と社会的スキル尺度下位項目別では、初歩的スキル($r=0.45$)、高度のスキル($r=0.55$)、感情処理のスキル($r=0.45$)、攻撃に代わるスキル($r=0.57$)、ストレスを処理するスキル($r=0.40$)、計画のスキル($r=0.60$)とでも高い正の相関($p<0.001$)が見られた。次に、社会的スキル尺度全体と実習適応感尺度下位項目別では、取り組み姿勢($r=0.58$)、自己評価($r=0.43$)、学習準備状況($r=0.44$)、基本的信頼感($r=0.61$)とでは高い正の相関($p<0.001$)が見られた。

IV. 考 察

1. 実習適応感尺度の構造と信頼性

実習適応感尺度は「取り組み姿勢」「自己評価」「学習準備状況」「基本的信頼感」からなる4因子構造を示していることが明らかとなった。

看護学における実習は、学内における講義や演習と異なり、臨地において医療チームの一員として看護を学ぶこととなる。学生は多職種にわたる専門的医療チームの中で、共にケアをしながら、学習者としての責任や役割を身につけていく事が求められている。また、専門職との協働的人間関係のなかでは、専門的な問題解決や対処方法に参加する機会も多々あり、統合された専門知識が必要となる。更に、多様な発達段階の人で構成された社会と関わる機会でもあり、円滑な人間関係を築くための社会的スキルも必要となってくる。実習適応感尺度より抽出された下位項目である「取

り組み姿勢」は、目標達成に向けた最も基本となる内容であり、学生としての役割と責任を示している。実習の中でも特に基礎看護学実習では、学習者としての視点を学ばせることが重要である。そのため、第1因子で高い因子負荷量を示したと考えられる。また、第3因子の「学習準備状況」も実習に臨む取り組み姿勢の項目であるが、中でも専門的知識を統合するための事前学習や自己学習が特に重要であることから、1つの因子として構成されたと考えられる。

第2因子の「自己評価」と第4因子の「基本的信頼感」は精神的側面を反映した因子である。実習において、学生が目標達成にむけて適応していくためには、専門知識や社会的スキルの習得はもとより、学生が困難な場面やストレスを感じる場面に遭遇したときに、どのように問題解決させ再適応できるように指導していくかは、教員や指導者にとっては大きな課題である。学生は実習環境に不慣れな上に、これまでに経験のない治療的人間関係を築きながら実践をとおして学習しなければならないという何重もの不安を抱えている。村上¹⁹⁾特に基礎看護学実習に臨む学生の緊張や不安が高いことを報告しており、辺士名¹⁵⁾は学校生活における適応群は不適応群に比べ積極的に何かをしたいと望む態度が強く、肯定的な自己概念が形成されていることを報告している。このことから学生の実習に対する不安や緊張が消極的実習態度に結びついていることは容易に推察できる。また、学生は実習場面で看護者としての役割を果たそうとすればするほど未熟な自分と向き合わなければならないと、ありのままの自分を受け入れることができるかどうかがかがストレスと関連していると考えられる。吉永⁴⁾は学生が自己理解を深める過程で、看護者として未熟な自分自身を認められず、信頼できなくなった時を「実習拡散感」と位置づけ、自我確立と高い逆相関があったことを報告して

おり、実習適応に青年期の発達課題である自我同一性の獲得が大きく影響していることが考えられる。このようなことから、第2因子に「自己評価」が高い因子負荷量を示したことは、実習適応感を測定する尺度としては妥当であったと考えられる。

第4因子では、教員や病棟看護師およびグループメンバーなどのサポートに対する意識で構成されており、「基本的信頼感」と命名されていた。基本的信頼とはエリクソンによると、乳幼児期に人生で最初の発達課題として獲得が期待されるもので、青年期においてより時間的展望をもつものとなり、自らの人生を統合するものとされている。また、基本的信頼に基づく信頼感は、他人へと自分への2つの方向性を持つことが指摘²⁰⁾されており、自己概念を規定する要因であることは既に明らかとなっている。このように、自我同一性の獲得には信頼感が重要な役割を果たしており、実習中のサポーターへの信頼感は実習適応に影響していることが考えられる。中平は⁶⁾、「学生の実習適応に一番強く影響しているものが教員・グループメンバーのサポートであり、学生は教員・グループメンバーのサポートがあるほど実習に適応でき、看護職に対する満足度も高まる。」と指摘している。このように実習適応感の構成概念には教員やグループメンバーへの基本的信頼感が含まれることが明らかとなった。

2. 実習適応感尺度の妥当性

実習における実習適応には、教員やグループメンバーの他、患者、病棟看護師、医師など多様な医療チームメンバーと関わる機会でもあることから、円滑な人間関係を築くための社会的スキルも必要となってくる。そこで、実習適応感尺度の妥当性を検証するために、菊地の社会的スキル尺度との関連を見た。社会的スキル尺度は自己効力感や対人関係との関連性についての研究でも多く使われており、信頼性・妥当性の高い尺度である。

実習適応感尺度と社会的スキル尺度の間では有意な高い相関関係が認められた。中でも実習適応感尺度は社会的スキル尺度の「ストレスを処理するスキル」「攻撃に代わるスキル」「高度のスキル」との相関が高かったことから、実習場面における他者とのトラブルの際に、謝罪や依頼が上手くでき、この時に生じたストレスを上手く処理できる者ほど実習適応感が高いことが明らかとなった。藤野ら²¹⁾は「対人関係に関する経験が多いことが社会的スキルを高めていた」と報告して

おり、「対人関係における苦手意識や実習での困難な対人関係を感じる事が社会的スキル向上の妨げになる」とも指摘している。このことは、実習適応感尺度の下位項目である「自己評価」と社会的スキル尺度の間で有意な高い相関があったことと一致しており、実習適応感尺度の妥当性を示すものと考えられる。

また、社会的スキル尺度は実習適応感尺度の「取り組み姿勢」「基本的信頼感」と高い相関関係を示しており、社会的スキルの高い者ほど実習への取り組み姿勢が良好であり、教員やグループメンバーへの信頼感があり肯定的な自己概念が形成されている可能性が示唆された。

このように、実習適応感尺度と社会的スキル尺度の間では、高い正の相関が示され、構成概念の併存的妥当性の高さが明らかとなった。

V. 結 論

1. 実習適応感尺度は「取り組み姿勢」「自己評価」「学習準備状況」「基本的信頼感」からなる4因子構造を示していることが明らかとなった。
2. 実習適応感尺度は内的整合性を示す α 係数より、一定の信頼性が確保できた。
3. 実習適応感尺度と社会的スキル尺度の間では、高い正の相関関係が認められ、構成概念の併存的妥当性の高さが示された。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、看護学生における実習適応に関する状態を測定する評価尺度を作成し、実習適応感の構造を明らかにした。そして、更に作成した実習適応感尺度の信頼性・妥当性を検証することを目的とし、一定の成果を得た。しかし、調査対象が少ないことと1回の実施であったことから、この結果を一般化することは困難である。そこで本研究は予備調査として位置づけ、今後は他の集団でも同様に調査を実施したい。そして今後は、作成した尺度の精度を高めると共に、作成した尺度で看護学生の実習適応感を測定し、より効果的な実習指導を行うための基礎を得ることを課題としたい。

引用文献

- 1) 金子道子：看護論と看護過程の展開、p.2、照林社、1999.
- 2) 江口信枝・坏千代子：基礎看護学実習と認識の発展、足利短期大学研究紀要 18：1998：p.51、p.58-59.
- 3) 田村綾子 他：看護学生のストレス原因と対応法、看護展望 16：1991：p.76-80.
- 4) 吉永喜久恵・大沢正子 他：看護学生の自我同一性と実習適応感。神戸市立看護短期大学紀要 8：1989：pp.67-80.
- 5) 吉永喜久恵・近森栄子 他：臨床実習にともなう自我同一性と実習適応感。神戸市立看護短期大学紀要 9：1990：pp.35-45.
- 6) 中平洋子：臨床看護学実習における学生のストレスと実習適応に関する一考察 愛媛県立医療技術短期大学紀要 8：1995：pp.137-144.
- 7) 細見明代・川越清子 他：看護学生の看護婦イメージに関する研究－看護婦としての自己イメージと適応感－ 神戸市立看護短期大学紀要 11：1992：pp.27-39.
- 8) 東 洋・大山 正・詫摩武俊：心理用語の基礎知識 有斐閣ブックス、東京 2001：p.49.
- 9) 水野正徳：青年期の自我同一性。関西青年心理研究会 1982：pp.23-30.
- 10) 大山 正・藤永 保・吉田正昭：心理学小辞典 有斐閣 東京 1994.
- 11) 南口佳寿江・吉田正子：看護学生の短大生活への適応に関する調査 広島県立保健福祉短大紀要 1(1)：1995：pp.35-42.
- 12) 落合 翠・高間静子：入院患者の適応の概念枠組み 富山医科薬科大学看護学会誌 5(1)：2003：pp.91-96.
- 13) 堀 洋道・山本真理子 他：心理尺度ファイル 人間と社会を測る 垣内出版、東京 2000.
- 14) 堤由美子：臨床実習用ストレス質問紙 (CSQ) の日本語版の開発 日本看護研究学会雑誌 17(4)：1994：pp.17-26.
- 15) 辺士名則子・金城育子 他：学校生活における適応群・不適応群の特徴についての調査研究
- 16) 小林雅之：子供の社会的スキルの問題に関する展望 日本行動療法学会誌 16(2)：1990.
- 17) 堀 洋道・山本真理子 他：心理尺度ファイル 人間と社会を測る 垣内出版、東京 2000：pp.241-244.
- 18) 菊地章夫：また/思いやりを科学する 川島書店、東京 1998：pp.185-207.
- 19) 村上静子：臨床実習に臨む学生の不安について 京都府立看護短期大学紀要 16：pp.69-72.
- 20) 天貝由美子：高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究 43(4)：1995：pp.364-371.
- 21) 藤野ユリ子・室屋和子 他：看護系大学四年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル 産業医科大学雑誌 27(3)：2005：pp.263-272.